

<実践報告>

教頭の視点からみた小学校統合の取組と課題

藤井善章 中野市立高社小学校
森下 孟 信州大学学術研究院教育学系

Practice and Challenge of School Consolidation
from the Perspective of Vice-Principal

FUJII Yoshiaki: Kosha Elementary School, Nakano City
MORISHITA Takeshi: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	4つの小学校が閉校し、新しい学校に統合していく経緯について、特徴的な実践を通して、留意点や目指すべき点を明らかにする。
キーワード	閉校 統合
実践の目的	4校を閉校し、新校に統合するまでの経緯の報告
実践者名	第一著者と同じ
対象者	長野県中野市立長丘小学校の全職員（14名）と全児童（67名） 長野県中野市立平岡小学校の全職員（23名）と全児童（252名） 長野県中野市立科野小学校の全職員（15名）と全児童（51名） 長野県中野市立 倭小学校の全職員（12名）と全児童（40名）
実践期間	2018年4月～2020年3月
実践研究の方法と経過	4小学校が統合に向けて推進していく経緯について、学校で行われた特徴的な実践を通して、留意点や目指すべき点について検討した。
実践から得られた知見・提言	<ul style="list-style-type: none"> ・校務分掌により年間を通して教員組織が動いていることから、係会組織を作っておくと準備がしっかり行える。逆に係会を組織していない部分の準備が滞った。 ・統合に向けた試みは、できる限り年間暦に位置付けるとよい。その予定に向けた動きができて確実な実行が期待できるだけでなく、職員の負担軽減にもつながる。 ・新校の規模を想定した授業を体験することで、児童・教師双方に統合後の日常生活をイメージすることができたり、不安解消にもつながったりする。

1. はじめに

今後、ますます進む少子化により、学校の統廃合は日本各地で行われていくものと予想される。2006年度に全国の公立小学校は22,607校であったが、2016年度には20,011校と10年間で2,596校少なくなっている（文部科学省2017）。2019年度末をもって、中野市立長丘小学校・平岡小学校・科野小学校・倭小学校の4校が閉校し、新校として2020年4月に中野市立高社小学校が開校した。第一著者は、2018年度から2019年度までの2年間、中野市立平岡小学校の教頭として勤務した。本研究は、複数の小学校が閉校し、新しい学校に統合していく経緯について、統合準備委員会の中でも学校が主として関わる教育部会での特徴的な実践を通して、また、様々な事柄を中心となって進めていく教頭の目線で、留意点や目指すべき点を時系列に沿って明らかにすることを目的とした。

【参照】中野市立小学校及び中学校適正規模等基本方針（抜粋）（中野市2017）

2016年9月総合教育会議で「中野市立小学校及び中学校適正規模等基本方針」を策定。

高社中学校区の4小学校（長丘小、平岡小、科野小、倭小）について、

- ① 4小学校は統合し、位置は平岡小とする。
- ② 児童数の減少が顕著な地区であり、2020年度の推計では、3小学校（長丘小、科野小、倭小）で全学年が単級となり、平岡小は2学年が単級となる。また、学級の児童数が一桁となるのが、倭小で全学年、科野小で5つの学年、長丘小で2つの学年である。かつ、長丘小、科野小、倭小は、国基準で複式学級に該当する学年が存在するようになるが、県基準でかろうじて複式学級を免れる状況にある。

2. 2017年度まで

2017年1月31日より中野市小学校統合準備委員会において統合に向けての検討が始まった。この委員会では、統合に関する課題の調整や検討を効率的に行うため、「総務部会」「地域・PTA部会」「通学・安全部会」「教育部会」の4つの部会を設けた。

教育部会は、校長・教頭・教務主任・事務・研究主任・養護教諭・総合的な学習の時間・生徒指導・人権教育・特別支援担任・図書館司書・専科（音楽・家庭）・学年会の13の係会を組織し、検討を重ねた。この中で、校長係会では教育目標を決めたほか、統合を目指すスローガンの策定、次年度年間計画に統合準備委員会を毎月1回水曜日に位置付けること、教育部会の2018年度における各係の役割と具体的な活動内容の決定等を行った。

教頭係会では、開校1年目の年間行事計画の試案を立てた。運動会が平岡小・倭小：6月開催、長丘小・科野小：9月開催、音楽会はその逆であるため、初年度は開校すぐの組織作りに時間を要することや「秋開催がよい」という長丘・科野地域の方々の要望も考慮し、運動会・音楽会ともに秋開催に決めた。また、学年行事も各校で取組が異なることや人数増で予約等が難しくなるため、バス等を利用した社会見学を1日設定して年間計画に位置付けることを決めた。その他、児童の集金や旅行貯金について、学年会計は前年度0

円で精算しておくことや旅行貯金残高を4校とも揃えておくことが確認された。

3. 2018年度

3.1 教育部会の編成

教育部会内に設置した係会の一部を見直し、以下のように組織を再編成した。

学校運営関係…校長・教頭・教務主任・事務

担任・担当 …学級担任(各学年)・特別支援担任・専科(音楽・家庭)・養護・図書館司書
係関係 …生活指導・人権・研究主任

教科・領域等…国語・社会・算数・理科・生活・図工・体育・道徳・外国語・総合

再編成の結果、学年係会だけでも各学年で計6つでき、合計で27個の係ができた。これらの係会を毎月開催することは勤務時間の面から難しいため、例えば5月は担任・音楽専科・担当の係中心、6月は教科会中心などと開催日をずらすことにした。しかし、平岡小以外の3校の教職員の中で、普通学級で授業をしている教職員は各学年1名+専科の計7名おり、上述のように開催日をずらしても4校のメンバーが揃わない教科があった。また、教務主任・生活指導・人権教育・研究主任などは、同一人物が複数の係を兼ねる場合が多く、これらの係会を同時開催することも困難であった。年度末に各校での校務分掌を決める際、校長係会で兼ねる教職員を決めておけば重なりを解消できたと思われる。

また、年度途中において、校歌作成係を立ち上げ、新校の歌詞を作成した。事前に児童から新校の校歌に取り入れたいキーワードを挙げてもらい、作成を行った。

3.2 4校の財産(卒業生作品、記念品等歴史的財産)の取扱いについて

長丘小・科野小・倭小の3校は今後、跡地利用が決まれば処分されてしまうことや、高社小の位置が平岡小に決まり、平岡小では「平岡小」表記の物品を処分する必要があることから、記念品・記念樹・記念碑等の取扱いについて地域に連絡し、2019年3月まで受け付けることとした。周知には、市にお願いするだけでなく、学校だよりで全校児童の家庭に知らせたり、地区の回覧板で地区の全戸に知らせたり、学校ホームページに掲載したり、音楽会の休憩時間に紹介するなどし、それぞれ引き取り手を見つけた。

石碑等の他にも地域クラブのトロフィーや賞状は引き取り手が見つかった。反面、卒業記念品や記念樹については、ほとんど引き取り希望がなく、処分することとなった。20年ほど前までは盛んに卒業記念等に学校に残す事業が多かったと思われるが、閉校する際には課題となる。また、丁寧な周知が必要となっていく。なお、統合準備委員会総務部会・施設部会での提案に基づき、資料室とメモリアルスペースを設け、4校で保存しておきたい財産については保管をし、希望者がいつでも見学できるように対応することとした。

3.3 4校合同事業について

開校に向け、教育環境の整備を自らの力と想いで実施するとともに、統合する4校間の交流を図るために2018年6月16日に「高社小学校交流広場を手作りで」が行われた。内容は芝生植栽作業・樹木植栽作業・インターロッキング歩道整備作業である。市教育委員

会主催で4校の児童・保護者・地域住民合わせて約200名が参加した。結果的に「約2年後に統合していくのだ」という意識を高める効果があった。また、平岡小以外の3校関係者にとって、新校に向けた整備の進捗状況を見ることができたことも大きな意味を持った。振り返れば、2018年度はこのような取組が一度しか行われなかったが、市教育委員会の取組に協力して児童・保護者・地域の方へ参加を促す事は大きなことであった。なお、この取組の様子は、翌日の地元新聞紙の一面に掲載され、県下に統合を周知する結果となった。

3.4 市教育委員会による学校側への配慮

中野市教育委員会には、基本的なスタンスとして、必要以上に学校側に負担をかけないような配慮を常にしてもらった。まず、統合準備委員会を原則として学校で開催せず、距離的に4校の中間地点にある公民館を活用した。学校で会議を開催する際にも会場準備や片付けは教育委員会職員が行った。また、2年間にわたり増改築をした平岡小では、仮職員室への引っ越しの際に、業者に机・椅子・ロッカー・荷物を運んでもらい、教職員は個々の荷物を運ぶだけであった。これにより、職員室→仮職員室と仮職員室→職員室の2回の引っ越しは非常に短時間で行うことができ、教職員の作業時間は正味1時間ほどで済んだ。

職員室については、机・椅子・キャビネットがすべて新調された。その際、市教育委員会からは、天板でつながっているオフィス機の活用が提案された。使い慣れたものをやめることには勇気が必要だったが、キャビネットを多めに設置したことで、今まで机上に置いていた荷物等を収納できるようになり、室内に荷物の見えない職員室を実現することができた。教職員の発想ではこのような机の配置に至らなかったため、市教育委員会のような第三者的かつ行政的な視点が有効に機能したといえるだろう。

3.5 PTAについて

地域・PTA部会で規約や組織図ができたことを受け、2018年度中にPTA設立準備委員会を立ち上げた。ここからは、4校教頭も委員になり、学校が中心となって関わることになった。4校各校からPTA会長候補が集まり会長を互選で決める中で、1人の会長を決めるだけでなく、開校初年度には4人とも何らかの役を受け持とうという機運が高まった。結果として、4名で会長・副会長・施設部長・教養部長を割り当てることとなった。

全学年で新しい学級が組織されるため、学級発表がない限り、学級からPTAの役員を選出できないことは明白であった。そこで、開校の1年以上前から2020年3月17日を学級発表の日と位置付け、朝から1時間ごと、学年ごとに保護者が集まり学級発表・PTA役員決め・学年会長決めを行い、夕方にはPTA役員が集まって各部の部長決めを行うことにした。開校2週間前に役員を決めて、PTA活動の準備が進められるよう配慮した格好だ。

3.6 閉校記念事業の計画

教頭係会では、2019年度の4校共通の取組として、航空写真撮影、閉校記念運動会、閉校記念式典、記念誌作成、閉校式を行うことを確認した。閉校記念式典や閉校式では、市長や教育長が出席することから4校の日程調整が必要となった。これらの日程が確定しないことには年間計画を作成することができないため、市教育委員会の提示を待つことな

く、9月の教頭係会で調整して学校から市教育委員会に打診した。その結果、4校の希望通りに日程を組むことができた。また、各校記念事業として希望した航空写真撮影は、同じ業者に依頼することで先行した他校の取組を参考とし、全体的な負担軽減につながった。

4. 2019年度

4.1 教育部会の編成

2018年度は、各係の長が平岡小に集まりやすい傾向にあった。例えば、4校の学年児童が交流を行う際に会場が平岡小になるが、学年係の長になってしまうと、開催通知・3校から平岡小までの行政バスの手配・係会報告・会場準備などかなりの負担増になってしまっていた。そのため、平岡小教職員が学年係の長にならないように4校で申し合わせた。

反省点としては、情報係と安全係を作成しなかったことが挙げられる。情報係については、視聴覚機器の選定にかなり時間を要することとなった。この係については、6月頃に必要なことに気付いたが、各校の情報担当が行うと手間がかかりすぎて、困難が予想されたため、県加配の統合中核教員に担ってもらうこととした。安全係については、通学路、スクールバス、交通安全教室、自転車教室、朝の街頭指導、避難訓練など多岐にわたったり、バスでは市教育委員会との調整が必要だったり、交通安全教室や自転車教室や避難訓練では指導者との調整があったりと問題が山積であったので、教頭係会で進めた。

4.2 年間通して増改築の工事をしながらの活動に

新校になるにあたって、様々な増改築が進められた。統合で児童数・教職員数が増えるために不可欠なものである。ただし、通常に授業が行われている中での工事となるため、工事関係者との定例会議は綿密に行った。2019年度だけでも、計27回にわたる。これらの会議には、校長・教頭両者が極力同席するようにした。会議中での即判断を求められる場合が多く、持ち帰って協議するとそれだけ工期が遅れてしまうことや、一人で参加した場合に会議後に報告をする必要が生じてしまうことから効率化の面でも有効であった。

大きな音が出ると授業に支障をきたすことから、それらの工事は16時過ぎや土曜日に行うように要望した。授業参観日などの行事では全面的に工事を止めてもらった。市教育委員会が工事責任者に学校の鍵を渡しておき、教職員不在でも工事を進めることができた。

工事に関して教職員に諮ったり、伝達したりする項目が多岐にわたったため、原則として教頭が文書でまとめたものを発行し意見集約や周知を徹底した。この教職員向け文書だけでも計23回発行した。これらのことにより、安全でスムーズな工事進行ができた。

4.3 プール建設について

増改築の中でもプール建設は大きな事業の1つであった。様々な要因が絡み、国からの予算が下りず、建設開始が遅れていた。4月末から工事が始まったが、5月には1学期に完成できない可能性が明らかになった。そこで、万が一プールの完成が遅れても平岡小の水泳の授業が行えるようにするため、完成するまでの間、平岡小の児童が市の行政バスを使って長丘小や科野小のプールへ出かけて授業を行えるようにした。

新しいプールは教室のすぐ北側に設置されるため、児童が建設中のプールをいつも観察できた。古いプールが取り壊され、何もない所から新しいプールができあがっていく様子を日々見てきた子ども達には彼らなりに思う所があったようで、プール完成間近になると、子ども達から「私たちのために雨の日も暑い日もプールを作ってくれた工事の方々に御礼がしたい」という申し出があり、6年生が感謝の会を行うことになった。子ども達が、人々に思いを伝える機会はなかなかあるものではないため、これも貴重な機会となった。

4.4 4 校合同授業

2018 年度は、新しい年度が始まってから同一学年による 4 校での合同授業の日程を決めていたため、日程調整が難しかった。例えば、当該学年の調整が済んだあとに会場校の平岡小に確認すると、新たに決まった行事と重なり、日程を組み直す事態も見られた。

そこで、2018 年度最後の学年係会で「次年度に自身の学年を持ち上げると仮定して、合同授業をいつ行いたいのか」という希望を出してもらうことにした。①学校で一番多く過ごす時間が授業であり、その中でも毎日行う国語と算数の授業を統合後と同じ規模で経験させたいこと、②学級によって異なる授業であると各校に戻ってからもう一度扱うことになってしまうので、そのような事態を避けること、③普段少人数の授業を行っている教員が大人数を相手にした授業を体験することで、課題を体感し、学校に戻ってから閉校までにその課題の解決に取り組めることなどから次の条件で希望を出してもらうこととした。

- ・1 学期と 2 学期に各 1 回ずつ行うこと
- ・1 回で 2 時間の授業を行うこと
- ・新校でのクラス数と同じ数にクラス分けすること
- ・交流会ではなく、年間一番多く行われる国語と算数の授業を行うこと
- ・特別な事柄を扱うのではなく、教科書に載っている通常の授業を行うこと

第 3 希望まで出してもらい、どの学年の希望にもかなうスケジュールを設定した。予め日程を確定できたことで、統合加配教員が、学校間を行き来する市の行政バスの予約や市に提出する校外学習計画や保護者に出す通知を一括でき、学年担当の負担軽減ができた。

また、実際の授業の様子は、授業者に聞き取りをして、統合加配教員が 4 校の保護者向けに通信として発信した。以下は、そこに掲載された児童および教職員の声である。

【児童の声、児童の様子】

- ・緊張したけれど、自分の考えたことを全体の前で発表できたことがうれしかったようでそれを見ていた先生方に認めてもらい、自信になったと思った。
- ・合同授業をやると言ったときに不安がる子もいるのではと思ったが、そんな様子はなく楽しみにしている子が多いと感じた。
- ・中には授業の流れに乗れなかった子もいたようだが、回を重ねていくことが大切。

【教職員の声】

- ・今回のように授業という形で実施した方が、子ども同士がコミュニケーションを取る必然性が生まれてきてよかった。統合後のイメージが持てた。
- ・30 人を超える人数の中で授業体験ができたそのものが有意義に感じられた。

- ・「学び合い」の土台づくり，グループになったときに自分からわからないことをどんどん聞いたり考えたことを話し合ったりしている子が多く見られた．ただ，黙っている子もあり，各校各学級で学び合いの元となる「聞く，自分から聞く，話す」ということをできるようにしたいと思った．
- ・大人数の中での授業になるので，個に応じた指導をどのようにしていったらよいかがこのからの課題と感じた．

1学期は，国語と算数の授業を行ったが，2学期には，2学年のみが国語と算数で，1学年は体育と生活，3学年が国語と図工，4学年が図工と体育，5学年が算数と図工と様々な教科を扱った．6学年では学級によって総合・英語・人権と，異なる授業を行った．これは，合同授業を行う際に前述の趣旨を周知しきれなかったこと，2時間の国語・算数の授業に面白みがない，やりにくいなど教員側の都合が優先されたことが原因と思われる．

また，特別支援学級の児童が同一内容を履修していないことからその配慮を優先させた学年もある．第一著者は中学校での教員経験が長いため，児童との関係がつかめないうちで授業を行う事にさほどの抵抗感はないが，「どのような反応があるかわからない中での授業は難しかった」という教職員の感想もあり，小学校勤務の長い教職員にとってはハードルの高い取組であったと推察される．なお，そのような中，3学年は1人1台タブレット端末を利用した授業を試みた．長丘小と倭小の児童は，授業でタブレット端末に触れることは初めての経験であったが，平岡小と科野小の児童に聞くなどして無理なく取り組めた．

4.5 4校合同事業について

2019年度は，市教育委員会・テレビ信州・北信州森林組合等の主催で7月20日と8月3日に「下駄箱DIYプロジェクト」が行われた．内容は地域産材を用いて児童昇降口の下駄箱の作製である．4校合わせて約200名が参加した．この取組の様子は24時間テレビの地域枠の時間に放映された．現在，児童は毎日この下駄箱を利用している．

4.6 高社小ホームページの作成

合同授業の様子や校舎の増改築などは平岡小で行われていたことから，高社小関係の情報は平岡小ホームページに掲載されやすく，他地域の方は平岡小ホームページでないと新校の情報を得にくい事態が生じていた．それぞれの学校ホームページにリンクを貼るよりも，開校前であっても高社小ホームページを公開する方が得策と考えて市教育委員会に提案すると，2019年10月1日より開設が実現した．開設の際，以前に平岡小で公開した高社小関連の情報もコピーして公開するようにした．当初は検索サイトでヒットしなかったが，100アクセス超から検索できるようになった．高社小の運動着Q&Aや合同授業の様子，増改築の状況などを随時情報提供することができ，半年で1000アクセスを超えた．

4.7 開校しようとする学校の教職員と閉校する学校の教職員との意識のずれ

平岡小以外の3校の職員会議は，閉校になることをふまえ，大きな行事を行っても反省や申し送りをしてこなかった．一方，平岡小では，毎年と同様に各行事が終了するごとに反省を行っていた．秋の音楽会が終わり，職員会議で平岡小が反省を行っていることが，

統合準備委員会の際に 3 校にも伝わり、「平岡小だけは、音楽会の反省や来年度の申し送りを行っている。平岡小だけで高社小のことを議論するのか」という声が聞かれた。各行事の反省の仕方を事前に決めておき、反省点や申し送り事項を集約する作業をすればよかったと思われる。運動会や音楽会は大きな行事であり、職員の思い入れも強いため、そのような意識のずれを起しやすい。そこで、平岡小の 12 月の職員会議では、校長が意識のずれについて紹介し、4 校の気持ちを合わせて気遣っていく意識をもっていくこと伝えた。

4.8 4 校のデータ管理について

中野市の小中学校では、2015 年度から校務データを校内ではない別の場所で集中管理している。高社小のデータについては平岡小のものをベースに作成していくことになっているが、他 3 校のデータについても開校後に必要になってくる可能性があるが容量に限度がある。そこで、別の場所で管理する校務データは他 3 校の前年度（2019 年度）のデータと平岡小のみとし、写真・動画などは校内のサーバー室へ各校のハードディスクを持ち寄り、それぞれのデータを教師用 PC でいつでも取り出せるように設定してもらった。

4.9 廃棄物処理

平岡小は不要物を廃棄できないと 3 校からの備品などの物品を収納できないため、2 年間かけて 4 回に渡り様々な物品を廃棄してきた。また、3 校は閉校後に売却等も考えられることから不要品廃棄に努めてきた。平岡小は収納スペースの関係で早めに取りかかったが、3 校は取りかかりが遅かったため、3 学期に集中して取り組むこととなり、最後の 2 ヶ月は慌ただしかった。廃棄物運搬の市職員を確保するため、4 校同日に廃棄作業を行う必要があったが、学校側で都合のよい日を決めていくことでスムーズなやりとりとなった。また、通常では捨てにくい不燃物も 100% 持って行ってもらい、大変ありがたかった。

4.10 引っ越し

2019 年夏より各係より 3 校から平岡小や市内他校へ移動したい備品や物品をリストアップしてきた。リストアップして移動すると決めたものについては予め目印となるシールを貼り、誰もがわかるようにしてきた。各係の希望をそのまま通したため、移動物品は膨大な量となった。また、破損していた机・椅子があることや統合により児童数が増えるため、机・椅子は計 200 セットほど必要であったが、新規購入数は約 3 分の 1 であり、残りは 3 校から移動が必要となった。さらにメモリアルスペースに残す思い出の品や永年保存などの様々な保存資料も運ぶ必要があった。

これだけ大量の物品を 3 校からわずか 1 日（2020 年 3 月 19 日）の間で引っ越し作業を行うこととなった。運んだ物品を整然と置くには既存の棚では足りなかったため、3 月 10 日から必要な棚を第一筆者が中心となって選定し 2 日後に希望を市教育委員会に伝え、引っ越し前日の 18 日には 3 校から希望した約 20 個の棚を業者に運んでもらった。3 校の物品には 3 校職員が行き先シール（平岡小のどの教室かまで明記）を貼り、当日は昇降口まで 3 校教職員が運び、移動には専門業者と教育委員会職員が入った。憂慮された大きな混乱はなく、必要とされた場所に 1 日で物品を納めることができた。

4.11 学級発表と PTA 発足

新年度（2020 年度）の学級発表と PTA 役員決めに 2020 年 3 月 17 日に行うことは前述のとおり 1 年前から予告されてきた。しかし、新型コロナウイルス感染防止のために臨時休業となった影響で、学級発表等は 3 月 26 日に変更となった。幸い、この日は予定通り実施できた。PTA 役員決めの場面では高社小 PTA 設立準備小委員の 4 名が終日積極的に進行し、和やかな雰囲気の中で行い、この日のみですべての役員が決まった。

4.12 新年度準備登校（3 月 27 日）

今回の準備登校は、4 校が集まった初の顔合わせとなり、登校シミュレーションを兼ねたものとなった。そのため、教務主任係は、例年のない綿密な行動計画を立てることが必要になった。また、4・5 年生全員を準備作業に当たらせたい希望もあり、今まで 80 名前後で行われた作業を 130 名が行うこととなった。さらに新校の校歌練習も行うこととした。そのため、例年では新年度の異動がない残留教職員だけで行っていたが、この日は異動する教職員もほぼ全員参加することになった。教務主任会の役割分担がしっかりしており、それぞれの持ち場で作業を進めることができ、時間までには準備作業を行うことができた。

4.13 統合中核教員について

通常長野県では、統合後の円滑なスタートのために 1 名の統合中核教員の加配が、統合前年度から統合後 2 年間までの都合 3 年間配置される。高社小の場合は、4 校が統合するという大がかりなものであるため、統合 2 年前より配置された。

実際、今回統合に携わってわかることは、この判断が大正解であったことである。まず、統合準備委員会の各部会関連でいえば、大枠は開校 1 年前までにすでに決定してしまっている。つまり、1 年前の着任では、新校の学校づくりの過程はすでに終わってしまっていることになる。実際、教員が主に携わる教育部会を除くと、2019 年度は、他の部会はほとんど会議を開催していない。つまり、討議することや判断することの大方は、1 年前に終わっている。仮に、2019 年度から、統合中核教員が赴任したならば、新校になるにあたっての過程が見えないまま、準備を進めたことになるであろう。

5. まとめ（教頭の立場から一連の統合を振り返って）

本研究は、複数の小学校が閉校し、新しい学校に統合していく中で、様々な事柄を中心となって進めていく教頭の目線で、留意点や目指すべき点を時系列に沿って明らかにすることを目的とした。2 年間の一連の統合を振り返って以下のことが見えてきた。

5.1 校務分掌と校内連携

教職員は、校務分掌により年間を通して組織が動くようにできている。したがって、係会組織を作った系の準備は順調に進むことができた。年度末ごとに組織再編を行ったことは有効に働き、円滑な開校へとつながった。一方、安全係や清掃係・園芸係など係会を組織していない部分については、準備が滞り、開校後になって不備が見つかったり、閉校した学校に物品を取りに行ったりすることが多くなってしまった。たとえ、係の数がかなり

多くなってしまっても、係組織を編成することは大切である。

また、教職員は、年間曆に基づいて行動するようになってきている。したがって、統合準備委員会、合同授業や統合に向けたイベントなど、できる限り年間曆に位置付けていきたい。年間曆に入った行事について教職員は当たり前のように受け入れ、実行に向かっていくが、途中から追加されたものは、閉校さえなかったらやらなくても済むなどの気持ちが湧き、負担感にもつながってしまう。年間曆に位置付ければ見通しがつくので、それらの予定に向けた動きができて確実な実行が期待できる。

教職員には、途中経過をできるだけ伝えるようにしてきた。教頭係会で話し合ってきたことも毎回要約し、校長係会が各係の報告をまとめ、4校教職員に周知するなどの努力も続けた。これらの報告に加え、工事に関しての経過も綿密に伝えてきた。校内環境が改修・改善していく様子を知ることによって、教職員は、統合に対する期待感も増したものと思われる。

5.2 市教育委員会や統合校との連携

合同授業については、単なる顔合わせでなく、新校の規模を想定した授業を体験するように設定してきた。授業の実施に際しては教職員が思っているほどの心配もなく、合同授業を積み重ねていくほど、児童はなじんで授業に取り組むことができ、統合後の日常をイメージすることができた。児童は不安よりも期待が大きくなり、楽しんだ様子を家庭にも伝え、保護者の不安も徐々に解消していったものと思われる。統合後、不適応を起こす児童が続出することも懸念されたが、大きな心配をすることもなく、学校生活が続いている。

市教育委員会の担当者とは、毎週のように打合せを行った。「閉校・統合すること」自体が本来の業務よりも追加されていることであることを踏まえて接してもらったことで、教職員にも引っ越しのお願いを簡単に行うことができた。プロの業者に引っ越しを依頼すると、我々が行う引っ越しとスピード感が全く違う。前もって段取りをつけることには苦労したが、理想通りの引っ越しを行うことができた。工事については、工期があるので、最大限協力して遅くならないように心がけた。予算の総枠が決まっている中で工事を行っているので、購入できる備品にも限度があり、工期の後半よりも前半には割と融通が利き、早めの決断が功を奏した。そのことで、いくつもの準備が無事行えたことだろう。

教職員に助けられたことも数々あった。不平不満も多かっただろうが、統合に向けての消極的な発言はほぼ聞かれず、統合が当たり前として日々の準備に取り組んでくれた。このような姿勢に支えられた2年間であったことが、円滑に統合できた最大の理由であろう。

文献

- 文部科学省, 2017, 小中学校及び高等学校の統廃合の現状と課題, https://www.soumu.go.jp/main_content/000513102.pdf (accessed 2020.09.01)
- 中野市, 2017, 中野市北部地区小学校の統合について, <https://www.city.nakano.nagano.jp/docs/2018061100032/> (accessed 2020.09.01)

(2020年9月2日 受付)